

④2018年度の自己点検・評価及び外部評価の結果（別紙）

<外部評価委員からのコメント>

1. 「2018年度の事業成果」に対する評価

（評価者A）

おおむねよく進められているようであるが、プロジェクト全体としての方向性が見えてきておらず、また、農業生産に密接に関連する項目が多いものの、従事している農家の状況も見えない。隔々にまで目配り気配りが欲しいと感じられる。

（評価者B）

事業目的に沿っての活動目標を掲げ、それに順じて活動を実施しており、論文作成、対象素材の耕作地拡大、新潟県内食品加工企業との製品開発や新潟において栽培可能な薬草の関係機関との連携による選定活動や漢方相談センターで教育講座の開催、相談受けなど、それぞれ積極的に活動され、次つながる成果に結びついているものと評価いたします。

（評価者C）

新潟県の新しい農業へ向けて明確な課題認識を持ち、「米」食品から「大麦」による新しい加工食品の開発、「漢方」への取組み、地域の健康への取組みを行う本事業は課題解決のために必要な取組みであり今後も期待している。事業成果は項目の難易度も高く、年度計画を下回っている項目もあると思われるが、達成に向けて十分努力されている姿勢は記述内容から推察できる。貴学の「健康」というキーワードでの加工食品の育成、今までにない「地域産物」を育成ブランド化する試みは新潟県にとっては必要不可欠であり、最終年度では実施計画の項目を絞って実行、評価を上げることも必要だと考える。

（評価者D）

六条大麦の遊休地での作付けやベンチャー起業に向けた準備など、学部の枠にとらわれず、しかも前年度以上に意欲的な実施目標（麦、漢方、薬膳）に対して、具体的な活動が随所に踏み込んで実施されていると評価します。

2. 「2018年度の自己点検・評価」に対する評価

（評価者A）

（5）の自己評価がAであるが、他の項目と比べて非常に甘い採点で、結果報告に具体性もなく、疑問が残る。薬草栽培を実施とあるものの、昨年度も同じ項目で指摘したはずであるが、具体的植物の名称もひとつもあがっていない。（6）も同様に進められなかったことのほうが多いにも関わらず、Bという評価は甘い。これら以外については、おおむね妥当であろう。

（評価者B）

六条大麦の加工食品製造、新潟県ブランド品としての拡大への評価がCとは自己評価を厳しく見過ぎではないでしょうか。昨年も同様の事を記載しま

したが、原料品は天然物であり、当然収穫量の変動で目標数量が達成できないことは今後も有り得ます。それよりも今回は焼酎以外での「麦ごはんパック」の企画、挑戦は評価できるのではないのでしょうか。今後は「麦焼酎」「麦ごはん」においてもこの新潟産素材ブランド商品をどう育成していくかのマーケティング企画立案が重要です。自己評価は妥当と評価します。

(評価者C)

(6) : B 評点 → C 評点

「少なくとも3品目を選定し、漢方製剤企業と連携して漢方製剤を試験製造する」という目標に対しては、紆余曲折はあるものの試験製造できていない事実を考慮すればC評価が適切ではないか。

(7) : B 評点 → D 評点

「少なくとも5品目を試験製作し、試験製作した薬膳を試験的に供給し食事メニューとして評価する」という目標に対しては試作がなく、そこからの試験供給、食事メニューの提供がないことを考慮すればD評点が適切ではないか。

(評価者D)

(2) のC評価を除いて、概ね妥当ではないかと評価します。

【理由】

実施状況に照らせば、数値上の達成状況に関しては、作付面積の伸び悩みなど外部要因的な影響が大きいと判断。その中でも昨年以上の成果実績が見られます。また、「健康を支援する～ブランド化のコアとなる大学」は、地域、行政と連携しながら事業を進めていくことの延長線にあるように考えます。

十分な達成状況にあると認定して、Bと評価します。

3. 「2018年度の進捗状況」全体に対する評価

■助言

(評価者A)

上記に「全体の方向性」ということを書いたが、そこが課題と思われる。ブランディングをどのようなブランディングにするか、である。新潟という地域性をもっと強く表せる内容に順次方向づけていくほうが、地域住民（特に農家）を巻き込んで息の長いプロジェクトになるのではないか。具体的には、薬用作物の種類について、どこでもやっている当帰の地上部利用、だけでなく、佐渡の歴史的薬用作物である蒼朮をもっと活用できないか、大学がリードして新たな取り組みを考える、とか、ロシアとの結びつきが強いことから、甘草やウコギ類などロシアからの輸入が期待できるものについて研究してみるとか、他ではまねができないようなアイテムをいくつか育ててはどうだろうか。サポート資金がなくなればすぐにしぼんでしまうようでは無駄が多いと思われる。

大麦プロジェクトの順調な点と、薬用作物関連のプロジェクトの弱さを合わせて考えると、ハト麦（ヨクイニン）やヤマノイモ（山薬）など、でんぷん系生薬としても食品としても利用される素材について、さらにプロジェクトを組んで見られてはいいのではないか。

(評価者B)

「六条大麦」を使った加工食品の新潟県産ブランド品としていかに県内はもちろん、全国に発信していくかのマーケティング企画立案がこれからの大きなテーマと考えます。原料となる素材の収穫量も制限があると思いますので、販売拠点も人が多く集まる場所（高速パーキング、ふるさと村、冬のスキー場など）が候補ではないでしょうか。そういう販売店へのプレゼン資料を生産企業と一緒にあって作成が重要です。

(評価者C)

貴学内での試験研究や分析、薬草栽培など学内で完結できる項目については評点が高い一方、研究内容を実際の事業として学外と連携しながら実践し、事業化していく部分は評点が低いように思われる。そこが難しい部分であるが、学外とも連携しながらブランド化、事業化を進めて欲しい。

■期待できる点

(評価者A)

大麦の利用については有意差のあるデータを得て論文を準備中ということである。論文として発表するに至るデータをきちんと取られたというのは素晴らしい。機能性の証明は意外と難しいが取り組みやすい素材であるため、継続できていると思われる。大麦の成功例をもとに、類似のもう少し薬用に近い素材についてチャレンジされてほしい。

(評価者B)

大麦や麦ごはんそのものが「健康」のイメージがありますので、新潟県特産健康食材、食品として期待できるのではないのでしょうか。

(評価者C)

高齢化社会が到来しており、生活習慣病の予防による健康寿命の増大や健康に対する意識は今まで以上に高まっている。特に「低糖質」、「糖質ゼロ」など血糖値関連の指標に対する消費者の関心は非常に高まっており貴学の「大麦」についてのブランド化や加工食品化は大いに期待できる。

(評価者D)

健康への貢献を念頭に置いた意欲的な取り組みは、地域の健康意識の高まり、健康経営の希求に随所で重なり合う部分があります。大学の理論と実践の場として、地域を実証実験の場として活用されることを期待します。

■その他

(評価者C)

(3)の項目については(2)の製造、販売の事業化スケジュールを具体化し、事業化見込みを詰めることが必要と思われる。